

松江で雪かき助け合い

住民共助の大切さ痛感



除雪機を動かす除雪隊員—松江市下東川津町

1月24日からの寒波による大雪で、一時は40センチに迫る積雪となった松江市。公的な除雪の手が回らなかった生活道では、各地で住民の助け合う姿が見られた。雪に慣れない平野部の生活への支障は大きい。除雪などを通して共助の大切さを痛感した人も多い。

「本当に助かりました」

松江市下東川津町に自宅がある広島県呉市の男性(61)が、27日の出来事を振り返る。自宅前に膝下までの積雪があったこの日は、病院で亡くなった父親の遺体の帰宅を控えていた。

目の前の生活道は雪に覆われ、車が立ち入れない状態だった。家には高齢の母と妹しかいない。頭を抱えていると、外からスコップで雪をかき分ける音が聞こえてきた。表に出ると、近所の住民による除雪隊の姿があった。

町内会の16人で2017年に結成した除雪隊は、大雪の際に通学路や高齢者の家を中心に出勤する。人力と除雪機で道を切り開き、男性は自宅でゆっくりと父

の死を悼むことができた。「地域にこうした団体があってよかった。ありがたかった」と感謝する。

除雪隊メンバーで27日の除雪作業に当たった小塚昭郎さん(69)は「(お父さんが)家に帰りたいだろうと思ひ、やれることはしてあげたいとの思いだった。ご家族と一緒に過ごす時間ができてよかった」と振り返った。

今回の大雪では、入り組んだ道や駐車場などで立ち往生する車が相次ぎ、空回りするタイヤ音を聞きつけた人が集まり、協力して車体を押す姿もあった。

降り始めの24日夜に車がスタックし、救助してもらった同市八雲台工丁目の会社員女性(35)は、改めて人の温かさを実感したといい「普段はほぼ付き合いの無い人に助けてもらった。次は自分が恩返ししたい」と話した。

(山本貴子、中島諒)

山陰社会

題字 原 静玖
(島根大付属義務教育学校後期課程7年)